

## 『女性と昔話』

竹内 邦孔

「女性」という大きな枠組みのタイトルに  
ひるむ。

それにもかかわらず、口承文  
芸研究の世界でどのように「女性」が問題  
化されてきたか、その一端を知るために、  
『口承文芸研究』を手にとると、「女性」を  
主題としたシンポジウムが、二〇〇七  
〇九年にかけて開催されていることが目  
に入る。その時、わたしたちは、この大きな  
主題にどう向き合おうとしてきただろうか。

まず、二〇〇七年には「女性と口承文芸」  
がテーマとして掲げられた。報告者の一  
人であった間宮史子氏は、『口承文芸研究』  
三十一号（二〇〇八年）で、「このテーマ  
には、複数のレベルが存在する。話の内部  
の問題、話の伝承経路や語る話との関係と  
いった語り手の問題、語りの場や聞き手と

いった語りのコンテクストの問題、そして、  
口承をとり扱う調査者や編集者、研究者や  
再話者や出版者の問題。日本の口承研究に  
おける女性あるいはジェンダーについては、  
まだこれから調査検討されなければならな  
いことが非常に多い」と今後の展望を総括  
している。そして、二〇〇八年には「アイ  
ヌ・女性・口承文芸」、二〇〇九年に「アイ  
ヌ文芸研究と女性―研究史に根ざして」が開  
催された。この回のコーディネーターを務  
めたのが、野村敬子氏である。氏は『口承  
文芸研究』三十三号（二〇一〇年）に寄せ  
た文章で、「骨子に「研究史と女性の社会性」  
をおくことにした」と述べている。この「女  
性の社会性」が、本書に収められた論文に  
通底した問題意識ではないか。そしてそれ  
が、著作の著者紹介の欄に、「主婦」と記し

てきた野村敬子という一人の研究者のその  
研究の基になっていると考えられる。

ここで本書の構成を紹介する。本書の  
論考は、最終稿を除き、國學院大學栃木短  
期大學國文學會誌『野州國文學』が初出で  
ある。

周産期と口承文芸―人生最初に出会うも  
の―（70号、平成十四年十月）

昔話の伝承と深化―山形県北の瓜姫譚・  
「胡瓜姫ご」をめぐる―（73号、平成  
十六年三月）

女性のフォークロア（一）子守唄の身体  
性（75号、平成十七年三月）

女性のフォークロア（二）産屋の「桃太  
郎」（76号、平成十七年十月）

女性のフォークロア（三）魚女房 焔く  
台所（78号、平成十八年十月）

女性のフォークロア（四）女房という怪  
異（80号、平成十九年十月）

女性のフォークロア（五）嫁姑・不幸な  
話柄（82号、平成二十年三月）

女性のフォークロア（六）「成女戒」と

「をとめ」——口承資料から再び——(83号、平成二年三月)

女性のフオークロア(七)「おんな・老い語り」の可能性(84号、平成三年三月)以降、ここまでの連作を「一」、「二」のように示す。

「口語り」の原風景——竹富島・前新トヨさんの語り——(86号、平成五年三月)

産屋の夜伽(『月刊百科』279号、平凡社、昭和六一年一月)

管見のかぎりでは、全体の「はじめに」と「あとがき」を除き、単行本化にあつての文章の異同はみられない。

まず目を引くのは、最終稿である。女性が命懸けで臨む出産の場の夜伽という習俗を描くこの論文は、「産む性」「育てる性」としての女性の在りようを昔話を聴く場によつて証すことの出来る「女性民俗の根源」について考えてみた」もので、自身の「原点となった視点」、「初心」であるとする。参考文献には、著者の初期の代表作が並び、一般向け雑誌に掲載された文章であるという性質からも、それまでの著者の研究の軌

跡が簡潔にまとめられて、いわば自己紹介の文章である。

そして、この論文集には全体を覆う視点がある。まずは、著者自身が「はじめに」で、本書を、「昔話の実感実証・伝承動態と女性たちの有機的な「声の習俗」を記した」と位置付けているように、「昔話の実感実証」があげられる。

著者の実感実証とは、師の白田甚五郎が説いたもので、「語り手」を訪ね、「聴き手」として魂のふれあう人間関係なしに、昔話の研究はなし得ないという教え(「はじめに」)『語りの廻廊 聴き耳の五十年』二〇〇八年、瑞木書房)である。語り手を訪ねるといふこと、その中でも特に、著者の故郷、山形県真室川町の存在が光る。その故郷への信頼は、それぞれの論文に当地の伝承が引かれていることに加えて、現在に至って、決まって二月に真室川町に調査に出かけることを、「私のこうした定位置

観察は故郷の言葉を私の昔話における伝承言語の第一義とし、昔話研究に最優先とする発想から続けてきたものである。その意

味で私の場合、山形県最上郡中心の女性民俗学的方法による昔話研究、論文もそれから導き出したものである。」という、「四」に含まれる記述からも明らかである。

また、それぞれの文章の冒頭部分は、執筆の動機を述べていく部分であるが、ごく身近なできごとや、家族の話題からそれを書き起こすかたちをとる。ここに研究者という立場だけではなく、一人の生活者としての著者の姿が浮かび上がる。著者は特に調査に出ることを「探訪」、「旅」と表現するが、このエピソード部分にふれると、日々の生活こそが研究であり、著者の旅であると思わされる。これは、伝承地域や昔話の概要を冒頭に持つてくる方法とは異なり、やはりまぎらざるは「人・語り手」に向けていることを示しているように思える。そもそも、論考で引かれている口承資料は、ほぼ、実際に氏が聴きとった話で構成されている。そのため、事例数は少ないようにみえるが、その背後に一つの事例紹介に収まりきらない伝承世界の大きさを想像させる。これは、これまで多くの語り手と出会

い、一度の出会いではなく、その語り手にじっくり向き合ってきた著者だからこそできる文体であろう。

そして次の視点としてあげられるのが、「口語り」である。「口語り」とは、「話者の口承・言葉を通じて享け入れる聴き取りの方法」であり、野村純一氏が、昭和三八年に「鷹匠口語り」(『芸能』五卷十一号、十二号所収、芸能学会)のように用いた語である。著者は、この言葉以前を、「聴き手側の理由を優先させた方法で口承文芸資料を求めていた。昔話の内容には注目したが本来そこにある筈の、語り手と聴き手の関係性や語りの場の雰囲気やながしにした感もある。資料以外の個人的な話は無駄なものとして歓迎しなかった。」と指摘し、語り手の日々の生活と不可分の関係にある昔話をその昔話の部分だけ切り分けて考えてきたことを明かす。そして、この方法には語り手が主体的に自身の生活を明らかにすることで、「内発的な口承によって、事実譚、生活譚が紡ぎだされるが、その経緯に昔話、伝説が内包されることも多い。

それは未分化な口承文芸の動態確認ともなる。未生の物語との出会い、口承世界なるが故の語り手と共有しながら構築する世界がある。」と、この方法を提唱する。野村純一氏は、それ以降用いなかったが、この「口語り」の語の創出に、共同研究者として関わった著者は、自身の著作のタイトルなどに自覚的に用いている。例えば、『谷むかし口語り』(平成十五年、渋谷区教育委員会)。そして、本書の「口語り」の原風景」で言及される前新トヨ氏が、語り手の一人としてクローズアップされる、『語りの廻廊』(二〇〇八年、瑞木書房)所収の「口語り」に続き、『栃木口語り 吹上現代古老に聴く』(二〇一〇年、瑞木書房)が上梓され、「口語りの可能性」(『昔話 研究と資料』40所収、平成二四年、日本昔話学会)が発表されている。この語は、徐々に著者の中で欠かせない方法として獲得されていった言葉であることがうかがえる。

論文の概要を紹介すると、「周産期と口承文芸」は、妊娠二二週から出生後七日未満

までの期間・周産期の記憶がある人々を取り上げるとともに、その期間に妊婦と胎児の周辺で行われた声の習俗を紹介している。「昔話の伝承と深化」で取り上げられているのは昔話「胡瓜姫ご」である。この昔話は、分類では、「瓜子織姫」の一類話とみなされるが、伝承地域の一つである、山形県真室川町の人々が「胡瓜」にこだわって語ることにについて考察する。そして、語り中の描写から、「胡瓜」が実は、地胡瓜として栽培されてきた、「シベリア胡瓜」であることにたどり着き、「胡瓜姫ご」は類型中の少数派な立場に留められていたが、「深化の」昔話研究上では、特有の地方文化の歴史的証左として存在することに気付かされる。何故、そこに語られなければならなかったか、その変遷の結果を探ることは、一方で今後どのように語り継ぐかの問題とも連動する」と、この昔話の未来までも見通そうとする。

「一」では、子供のための魔除けの習俗を、子守唄や神事での唱え事、沖繩・八重山地方の文身、祝儀性やモノガタリ性の強

い衣類や寝具を身に付けさせることなどを時代の縦軸と横軸とを駆使して遍く紹介している。

「二」では、そのなかでもそのモノガタリ性を期待された、「ちいさ子」の一人、桃太郎について、爺と婆が若返る「回春型」のひろがり近世の史料からとりあげている。

「三」では、旅先の近江彦根城下で出会った鯉への意識、「鯉女房」から昔話の世界へと入り、淡水魚と稲作のかかわりという共通点から、真室川の「鮭の大助」の世界へ舵を切り、昔話「鮭女房」と、その語り手の伝承世界にあるエビス講の日の記憶を「母が可憐となる台所、エビス大黒の祀られるハレの場として煌く台所とその賑わいが伝わってくる」と表現して、昔話の背景にある、台所・納戸という場所と民俗文化での女性の社会性を問題点として浮上させている。

「四」は、「喰わず女房」「女房の首」「鬼女房」について、女性と男性の民俗的位相や好みの違いによって、どこに主眼が置かれた話になるかという、昔話にみられる「性

差」の論考である。女性が管理、場の祭祀を担当する納戸には、禁忌や秘事が多く、それを覗き見た夫に死という制裁が訪れる「喰わず女房」の結末を当然とする女性の感覚。それを受け入れたい怪異と捉えるのが男性の感覚であるとの指摘である。また、「鬼女房」の、鬼でありながら夫への愛が生まれてしまう点に、女性の共感をみる。

「五」は、「肉付きの面」で、なぜ嫁と姑が対立概念として用いられるのかを、福井県の「吉崎御坊参り」にまつわる伝承から考察する。著者は、文芸作品にもみられるこのモチーフについて、嫉妬深さに対する罪からの女性救済という物語要素があることを指摘し、まとめる一方で、嫁姑の昔話を、「ひとつ家で暮らす女性の鬱屈、女性心意を逆手にとった後味の悪い昔話である。これらを私は嫁姑に仕掛けられた「不幸な話柄」としてみた。だれが仕掛けたかと言えば、説教師などの仏教口舌者、もちろん男性に違いない。」と、仏教的思考という言葉の背景に見え隠れする女性に対する好奇の目線をチクリと批判している。

「六」は、『日本民俗研究大系 第4巻

老少伝承』（昭和五八年、國學院大學）で著者が執筆を担当した、「成女戒」と「をとめ」という折口語彙を、歌謡と昔話から再び捉えなおそうという試みである。「をとめ」は初潮によって女性になる者、「成女戒」は、「子どもの領分にあつた少女が一人前の女性になる訓練を意味する自覚的なもの」である。折口信夫が「水の女」を南島の信仰生活から発想していることから、著者はまず、南島歌謡にその世界をみようとする。そこには初潮を迎えた女性が身に付ける衣料を歌う歌があり、それを歌う女性の語り手たちが初潮を迎えてから、厳しく機織りをしつけられたことを紹介する。さらに、初潮の際に月小屋に分離されるという習俗と、昔話で女主人公が山に捨てられたり、幽閉されたりする物語要素に訓練という意味がみられるという関敬吾の指摘から、渡部豊子氏の語る「鬼昔」に、山の機織り小屋という非日常の場で鬼と邂逅する訓練に出席する女性たちが語られることに、「成女戒」の残像をみる。そして、折口信夫の視点に「男

性のロマン」が含まれるとしながらも、「輸入宗教や政治をして月の障り・ケガレとして排除された女性の自然があるべき姿として女の座標軸に置いたこと」や、「をとめ」の認定を、「従前のまつりごとで、超自然として意識された巫女の力を自覚的な「女性全体、誰もが内在する自然」と受け止め」と改めて評価している。

「七」は、民俗文化の中で同じ位相にある子どもと老人。そしてその両者が登場し、時間を共有することを語る昔話があること。また、実際に老いた語り手たちが語る姿に、「高齢の透徹した高い境地にある伝承動態」をみ、それを「古い語り」と表現する。さらにこの論考では、そういった語り手たちが「方言」で語ることに焦点をあわせ、東京在住の二人の女性の語りの実践に注目する。まずは、山形県出身の菅野光子氏が取り組んだ、文芸作品『ぬくい山のきつね』の全編方言での語り直しから、方言語りの現在に言及していく。方言を伝承言語と呼び、故郷を離れた場所でも昔話を伝承言語で語る語り手の昔話に耳を傾けてきた著者

は、方言を昔話から排除していく動向に異議を唱え、かつて日本で吹き荒れた方言撲滅運動、それに警鐘を鳴らした柳田國男や柳宗悦の言葉を紹介していく。もう一人は、新潟県出身の中野ミツ氏、母は「吹谷松兵衛昔話集」の小林ツギ氏である。ミツ氏は昔話を語る時、聴いた当時の自分に戻ったような気持ちになるという。また、ミツ氏の昔話には共に語りだされる幼い頃の思い出が含まれ、それは彼女の昔話と不可分であるとして、語りの言葉を「口語り」という総体として捉える必要性と、昔話を集めし分類してきたこれまでの方法を反省しながらも、その両者の融合という研究方法を模索していくことを提案する。

「口語りの原風景」では、著者が優れた語り手として向き合った一人、故・前新トヨ氏、その「生まれ育った神の島・沖繩県八重山郡竹富島人ならではの感性」が発揮された口承資料を「思い出し語りの言葉をそのまま記述する方法「口語り」として紹介し、トヨ氏の伝承世界にふれるために向かった、竹富島への旅の様子を描いている。

ここまでみてくると、冒頭から「女性のフォークロア」と題された連作、特に(六)までの論考は、かねて著者が注目してきた「女性の社会性」という問題点から考えることのできる民俗事象をたどるが、それは、後の二編で展開していく「口語り」という、著者が新しく獲得した視点への助走ではないかと考えられる。

そして、これらの論文発表から五年を経た著者は本書を上梓した。学会が「女性」という問題意識でわき立ったあとも、著者は「女性」という視点を抱えて歩み続けている。先に紹介した間宮史子氏の指摘にもあるように、「女性」ということばが含み込むものは多岐にわたるが、自身の方法を呈示することで、著者は再び「女性」を問う姿勢をわたしたちに要請する。そんなタイトルではないかと受け取った。

二〇一七年三月 岩田書院 本体一五〇〇円  
(たけうち・くにこ／世間話研究会)